

工の中の蛙、阪大を知る



巻頭言

桑畑 進*

A frog at Faculty of Engineering begins to know Osaka University

Key Words : faculty, engineering, administrative staff, sustainable society

「平成 27 年から令和元年まで教務委員長を務めたので、1 階の教務課に頻繁に出入りし、引き続き令和 4 年までは教育研究評議員であったので、2 階の総務課、特に評価広報係へ通っていた。そして、今年度 4 月から工学研究科長を拝命し、3 階の経理課も含めた全ての課、係の事務職員の方々の協力を得て、大学運営に携わっている」という文章、工学研究科の教職員は普通に読んで理解するでしょうが、他部局の方の中には、「部局の事務室の事を書いているのだろうけど、2 階じゃの 3 階じゃのって何のこと？」と思われている方もおられるのではないのでしょうか？昭和 53 年（1978 年）に本学工学部に入学し、翌年から吹田キャンパスで過ごすようになってから現在に至るまで、他部局、他大学で勤務したことのない、昔で言う「生え抜き」、今では「絶滅危惧種」と自称している工の中の蛙である筆者は、工学部／工学研究科は大きい部局という感覚があるけど、何となく、どの部局にも独立した事務棟があって、工学研究科の雰囲気と同じようなものと思っておりました。そのような井の中感覚を指摘した最初の言葉を、筆者が教育オフィス員（平成 28 年～令和 2 年）であったときの議長の小林理事からガツンと頂戴しました。学生の海外出張における種々のチェックに関する議論の中で、「教務課と経理課との間で上手く連絡を取り合えば可能では？」との案

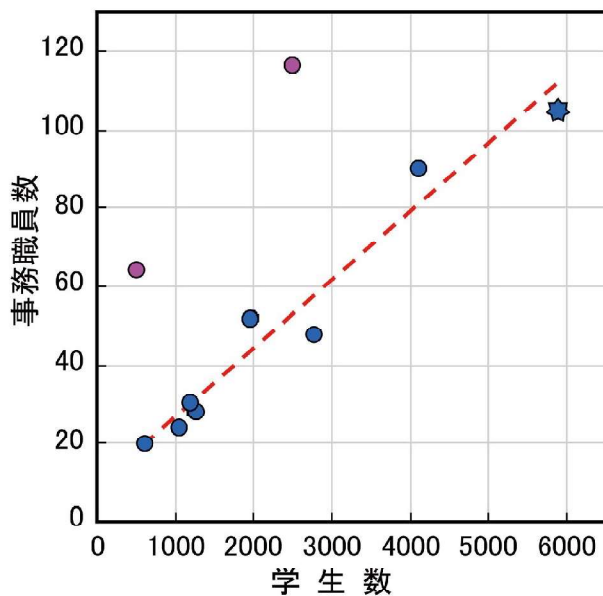
が出た時に「教務課は 1 階にあり経理課は 3 階で、こんなに離れた課の間で上手く連絡するのは上合無理でしょう」と全否定気味に発言した時に、小林理事から「桑畑先生、そんな状況は工学研究科だけで、教務課と経理課が同じ部屋にある部局事務も多いですよ」との指摘。それを他の部局の先生方はニコニコしながら聞かれ、ある部局の先生は「うちでは 2 つの課は隣同士ですよ」とのご発言。意図せずにはあるが、工学研究科が大きいことを暗に自慢してしまった瞬間であり、穴があったら入りたい気持ちになりました。それ以来、部局をまたいだ会議の際には、必ず各部局のサイズ感をはじめとする種々の違いを頭に入れて議論するようになりました。

事務職員は 3 年毎に異動することが原則ゆえ、工学研究科事務に現在いる職員の多くはこの事務が大きいことを実体験で知っています。それゆえ、4 月 1 日に行われている工学研究科に異動されてきた事務職員と工学研究科執行部役員との顔合わせでの挨拶で「他部局から来られた方は、この事務の大きさに驚かされているのでは？」と話す、「大きくて大変驚いた」と感想を言われる方が必ず何人かおられます。研究科の学生と教員が多いと事務の規模は大きくなることは当たり前ですが、その関係を知ることが無かったので調べてみました。一例を図に示します。学生数は学部、大学院の正規学生の総数であり、事務職員は各研究科の事務室あるいは事務棟におられる方の数に限定しました。赤い破線で示しているようにほぼ直線の関係にありますが、それから大きく上方に外れているピンク色で示した 2 点があります。これらは、函学研究科と医学研究科のデータであり、他の研究科とは異なるミッションのある研究科であることを物語っております。その 2 点を除いて求めた回帰直線が破線であり、「事務職員数 = 0.017 x 学生数 + 9.3」という式で表せら



* Susumu KUWABATA

大阪大学 大学院工学研究科前期課程
応用化学専攻 (1984年)
現在、大阪大学 大学院工学研究科
応用化学専攻 教授 工学研究科長
超高压電子顕微鏡センター長
工学博士 専門／電気化学
TEL : 06-6879-7201
FAX : 06-6879-7756
E-mail : dean@eng.osaka-u.ac.jp



れ、研究科全体の事務を扱っている職員数は研究科内の学生数の2%前後であることを意味します。そして、全学の学生数(約24,000人)の4分の1に相当する学生数(約6,000人)を有する工学研究科には110人ほどの事務職員がおられ、効率的に事務作業をするために独立した事務棟が建てられたものと思われます。しかし、他部局の事務室では教員や学生らが入り出りする場面が多いのに対し、工学研究科の事務棟(特に2階、3階)ではその可能性が低く、研究科の様子がわかりにくいとの意見もありますので、我々大学運営に携わっている教員は、それを補う必要性があると感じている次第です。

教職員人数の差のみならず、それぞれの部局の教育と研究におけるミッションの違いも部局をまたいだ会議の際に感じる事が多く、あとから慌てて各部局のホームページ等で調べることで徐々に大阪大学についての知識を増やしているという、恥ずかしい研究科長生活を過ごしております。部局間のみならず、専攻間の違いも改めて学びなおしております。私が所属する応用化学専攻では、「すぐに人の役に立つ研究」を行っている教員もおられますが、どちらかと言えば「将来的に人の役に立つである

う」学理的研究が優勢のように感じ、これも何となく「他専攻でもそうであろう」と思って過ごしてきました。しかし、工学研究科全体の教育や研究について語るべき立場になって、「工学研究科なのだから、人に役に立つ研究を行うことは当たり前」という真の意味を、他専攻で行われている「今必要とされている研究」を通して慌てて学びました。それゆえに会社との共同研究講座や協同研究所の数が多く、企業との共著の論文数が多いことを強調した挨拶を行ったり文章を書いたりするたびに、「どの口でそんなこと言うてるの?」と心で自分突っ込みをしている次第です。でも、そのような視点で応用化学専攻内を見直してみると、サステナブルな社会の実現を強く意識した研究を行い、議論している若い研究者が増えていることに気づき、「応化も変わりつつある」ことを強く感じ、若手研究者を育てる必要性をさらに強くしております。

自分の研究を推進するために、さんざん阪大にお世話になってきた工・応化の中の蛙は、役職に就くにつれ阪大の凄さ、素晴らしさを知るようになり、微力ながら阪大への恩返しを少しでもやって停年を迎える状況は悪くないなど思っている昨今です。学部から大学院前期課程、後期課程へと進学した著者は、後期課程修了時に出席すれば良いだろうと思い、学部卒、前期課程修了時には卒業式はスキップしました。ところが、後期課程2年生の時に助手に採用され、論文博士で学位を取得したので、大学の卒業式とは無縁になると思っておりましたが、部局長になった今、停年となる3月に卒業式に列席できる可能性が出てきました。せっかくのチャンスですので、それまでにコロナ感染症がスッキリ終息し、送る側と送られる側を兼ねる卒業式に出席できることを祈念し、それまで阪大をより詳しく知りつつ、阪大を盛り上げる役割をしっかりと担いたいと存じます。

なお、図に示した事務職員数の調査には、工学研究科事務部・総務課・庶務係の前島良信係長の協力を得ましたこと、御礼申し上げます。